

瀬戸内における塩の文化

1. はじめに

瀬戸内海では、古代において海藻に海水をかけて濃縮し、灌水を作る藻塩づくりが始まったとされている。その後、遠浅の海岸を利用した塩田で塩づくりが行われるようになり、江戸時代には播磨国沿岸に出現した入浜式塩田は、急速に瀬戸内各地へと広がった。瀬戸内海各地で効率のよい塩づくりが盛んに行われ、十州塩というブランドで日本全国に流通した。十州塩とは、播磨、備前、備中、備後、安芸、周防、長門、阿波、讃岐、伊予を指しており、19世紀初めに全国生産量の9割を占めるほどになった。この頃には、讃岐三白（砂糖、塩、綿）、防長三白（砂糖、塩、紙）、児島三白（イカナゴ、塩、綿）と称される地域の特産品として、塩が挙げられていた。製塩方法は、江戸時代から続いた入浜式から、1955年頃に流下式に代わり、設備が自動化され冬にも塩が作れるようになった。このように瀬戸内海では晴れの日が多い気候条件を利用して古くから塩が作られてきた。

その後、イオン交換膜法が開発され、1972年を境に流下式は完全に姿を消してしまった。現在も瀬戸内海においては海水から工業的に塩が製造されているが、国内の経済成長とともに工業用に塩が大量に必要とされたため海外から安価な塩が輸入された。塩の輸入量は国内生産量の7倍に達している。

2. 製塩法の歴史と文化

瀬戸内沿岸は、内海であるため四季を通じて海水の入手が容易であったことに加え、温暖少雨という気象条件に恵まれていたため、古来から製塩が盛んであり、数多くの製塩法が生み出されたところであった。

（海水素水法（海水直煮法））

これらの製塩法のうち、もっとも原始的なものが海水素水法（海水直煮法）と呼ばれるものである。土器に海水を汲み入れ、これを火にかけて水分を蒸発させて結晶塩を精製する方法であり、すでに縄文時代の晩期にはこの方法が行われていたことが確認されている。しかしこの方法では莫大な燃料を必要とした。

（藻塩法、塩田法）

そのため太陽光や風力、さらには海藻や砂などを利用して海水を濃縮し、この濃縮海水を煮詰めることで燃料の節約を図る方法が考えられていった。このうちホンダワラなどの海藻で濃縮海水を採集する方法を藻塩法、また砂を使用するものを塩田法（塩浜法）という。このうち藻塩法による製塩は、奈良時代中頃まで、瀬戸内海に限らず日本の沿岸各地で行われていたが、奈良時代からは次第に塩田法が一般的となっていった。

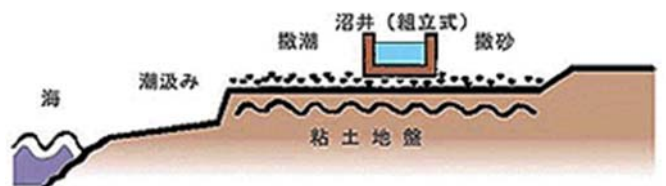


宮城県の御釜（おかま）神社では、毎年7月に「藻塩焼神事」（もしおやきしんじ）が行われ、その製塩法を現在に伝えている。

御釜神社「藻塩焼神事」での"かん水"をとる様子

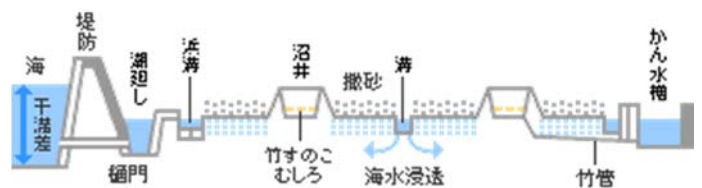
（揚浜系と入浜系）

塩田法は、塩田の造成位置から揚浜系と入浜系に分けられる。満潮水位より高い位置に塩田を造成するものを揚浜系という。これに対して入浜系とは干満潮の水位差を利用して、海水を塩田に導入するものをいう。この入浜系は揚浜系に比べて、労力の負担が少なくすんだ。しかし近世以前の土木技術では、海水の圧力に耐えるだけの堤防を築造するのは難しく、そのため海水を自由にコントロールすることは出来なかった。このような入浜系のものを近世以降に出現した入浜塩田と区別して、古式入浜と呼んでいる。そのため中世の製塩業では、労力の負担は大きなものがあったが、生産力も高く、日常的に作業が可能であった揚浜塩田のほうが歓迎されたようである。このような揚浜塩田が、平安時代末期から鎌倉・室町期にかけて、瀬戸内の沿岸部や島嶼部のいたる所につくられた。



(入浜塩田)

応仁の乱を契機に始まった戦国時代は科学技術が大きく前進した時代でもあった。鉄砲に代表される西洋の科学技術が取り入れられ、築城技術や築堤技術も大きく進歩していった。このような技術革新の結果、近代初頭になれば、海水の圧力に耐える堤防を構築することが可能となっていった。入浜塩田の出現時期は近世初頭、その出現場所は播磨国東部沿岸と考えられている。この地域は温暖少雨の気候に恵まれ、中世以来の製塩業の伝統を受け継ぐ地域であり、かつ同地域を流れる加古川・市川の河口付近には、上流から運ばれてきた土砂が堆積して、近世初期には広大なデルタ（砂州）が形成されていた。そのため簡単な堤防を築くだけで、塩田を造成することができた。さらに沖合遠くに堤防を築くことで、より広大な面積の塩田を造成することが可能になった。また、この地域は古代から採石された竜山石の産出地で、築堤に必要な石材が豊富なところであり、また「天下の名城」と称される姫路城を築き上げた大工・石工などの技術者集団が居住する地域でもあった。また大坂・京都に近接しているため、都市の形成・発展に伴う塩需要の増大にいち早く対応することもできた。



(赤穂塩田)

この播磨国東部で培われた製塩技術を移植し、当初から入浜塩田を造成する目的で開発されたのが赤穂塩田であった。正保2年（1645年）、赤穂五万三千五百石の領主として入封した浅野長直は、千種川河口の沖合を埋め立てる大規模な塩田開発に着手し、この地に大塩・的形・荒井地方の塩業者の移住をすすめた。これが赤穂東浜塩田である。

(入浜塩田の伝播)

17世紀中頃、播磨国沿岸に出現した入浜塩田は、急速に瀬戸内沿岸の各地へ広がっていったが、その最大の理由は収益の高さにあった。近世初期の入浜塩田では一軒前（五反九畝歩）で銀五百目～九百目の収益があった。これは同じ農地と比較して約10倍～20倍に相当する額であった。

(関連産業の発展)

17世紀初頭に出現した入浜塩田は、17世紀中頃の赤穂塩田の完成を機に、その圧倒的な生産力で在来製塩（揚浜塩田・古式入浜）を駆逐していき、瀬戸内の各地へ普及していった。そして元禄期になれば、瀬戸内沿岸に約1500町歩が開発され、近世塩業の主流へと発展していった。この製塩業の隆盛は、関連する諸産業の発展を促すことにもなった。廻船業もその一つである。瀬戸内の塩の多くは、塩輸送を専門とする廻船業者に売却され、全国各地へと運ばれた。

(休浜の提唱)

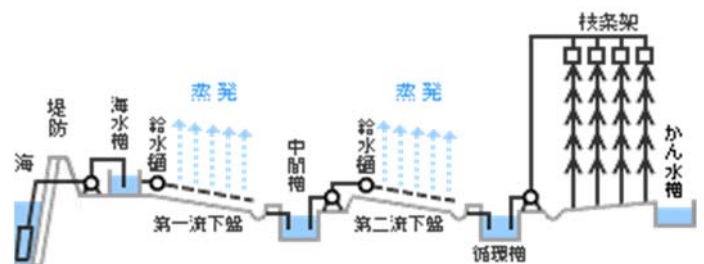
しかし順調に発展していた製塩業も、18世紀中頃になれば、相次ぐ塩田の開発で供給過剰となっていき、そのため塩価が下落して深刻な「塩田不況」に見舞われるようになった。この「塩田不況」を克服するため、瀬戸内西部の塩田を中心に導入されたのが、「休浜」とよばれる操業短縮・中止であった。

(十州同盟の結成)

文化9年（1812年）、これまで休浜への参加を拒んでいた赤穂塩田をはじめ播磨の諸塩田が休浜同盟に参加することになった。そして播磨国に遅れること8年、文政3年（1820年）には阿波が、さらに天保3年（1832年）には備前が加盟、嘉永4年（1851年）には一時脱会していた伊予が再び参加、嘉永6年（1853年）には讃岐が加盟、明治9年（1876年）の高松集会において備中が参加、ここに十州休浜同盟が成立された。休浜同盟は、地主・自作・小作を含めた全生産者のカルテルとしての性格を持つようになり、明治38年（1905年）から実施された塩専売の積極的な推進団体として機能していった。

(流下式塩田)

昭和の初め頃に平釜に変わって蒸気利用式塩釜・真空式蒸発缶が導入され、煮詰め工程に改革が起こった。さらに濃縮工程に流下式塩田が導入され、永年続いた入浜式塩田にとって変わった。流下式塩田とはかん水を採るための装置で、昭和27から34年にかけて入浜塩田から転換された方式である。地盤に傾斜を付け、その上に粘土またはビニールを敷き、さらに子砂利を敷いた流下盤と柱に竹の小枝を階段状に吊るした枝条架からなり、ポンプで海水を汲み揚げ、第一流下盤、第二流下盤・枝条架の順に流して、太陽光と風で水分を蒸発させる。これを何度も繰り返すことで、海水が濃縮される。この方法により年間を通して採かんが可能になり、入浜塩田のように砂を運ぶこともなく、労働力は大幅に軽減された。



(イオン交換膜製塩法)

昭和47年以降、従来の水分を蒸発・除去する方法から、海水中の塩分を集めるイオン交換膜製塩法が導入され、全面的にこの方法に切り替えられた。この方法は電気の利用して海水中の塩分を集める方法である。

(現在の塩事業)

1905年に施行されて以来92年間続いた塩専売法が廃止され、新たに塩事業法が施行された。現在は塩製造者が増え、様々な方法で塩づくりが行われている。

参照：「瀬戸内海の文化と環境」

公益財団法人塩事業センター（写真提供）

3. 瀬戸内海の子な塩の産地

(香川県)

降雨量の少ない同県では古くから製塩が盛んであり、弥生時代中期には土器製塩の技術が成立し、備讃瀬戸地域における塩づくりの中心となった。島嶼部や沿岸部の遺跡からは海水を煮詰めて塩を作る際に使ったと思われる製塩土器が多数出土している。

また、17世紀頃からの瀬戸内地域での塩田開発によって、江戸時代には讃岐、伊予、備前、備後、備中など瀬戸内十州塩田での塩の生産量は全国の80%を占め、砂糖・綿とともに「讃岐三白」と呼ばれていた。現在も製塩に関する施設は多い。

(徳島県)

鳴門地域における製塩の歴史は古く、5～6世紀頃の製塩遺跡が発掘されている。近世では、慶長4年(1599年)に藩主蜂須賀氏が播州荒井村(兵庫県)から技術者を招いて入浜式塩田を開いた。その後、藩の保護奨励により急速に塩田開発が進められ、製塩は江戸から明治、大正と、鳴門の一大産業となる。十州塩の生産地のひとつであり、阿波の塩田でとれる塩は、齊田塩(さいたじお)として全国に名声を博した。

製塩業の文化遺産として、「鳴門の製塩用具」が国の重要有形民俗文化財に指定されている。

(愛媛県)

降雨量の少ない同県では古くから製塩が盛んであった。弥生時代後期から奈良・平安時代にかけての製塩遺跡が発掘され製塩土器が出土しているのを始めとして、中世においては塩の荘園として京都の東寺に塩を貢納していた弓削島荘、近代においては十州塩の一つに数えられ全国に塩を移出していた波止浜塩田などがある。